



アマチュアオーケストラ

新交響楽団第139回演奏会

The New Symphony Orchestra the 139th Concert

指揮

飯守泰次郎

IIMORI Taijiro, conductor



写真：三浦興一

ワーグナー

歌劇「ローエングリン」第1幕への前奏曲

Richard WAGNER: Prelude to the 1st act of the Opera LOHENGRIN

歌劇「タンホイザー」序曲

Richard WAGNER: Overture to the Opera TANNHÄUSER

ブルックナー

交響曲第4番変ホ長調「ロマンティック」ノヴァーク版第2稿

Anton BRUCKNER: Symphony No.4 in E-flat major "Romantic" (1878/80 version)

1993年4月24日(土)7:00pm

東京文化会館

Saturday, April 24, 1993 at Tokyo Bunka-kaikan Main Hall

アマチュアオーケストラ

新交響楽団第139回演奏会

The New Symphony Orchestra The 139th Concert



指揮：飯守 泰次郎

IIMORI Taijiro, conductor

ワーグナー：歌劇「ローエングリン」第1幕への前奏曲

Richard WAGNER: Prelude to the 1st act of the Opera LOHENGRIN

ワーグナー：歌劇「タンホイザー」序曲

Richard WAGNER: Overture to the Opera TANNHÄUSER

—— 休 憩 ——

intermission

ブルックナー：交響曲第4番 変ホ長調「ロマンティック」

ノヴァーク版第2稿(1878/80)

Anton BRUCKNER: Symphony No.4 in E-flat major "Romantic" (1878/80 version)

第1楽章 揺れ動いて、速すぎないように 1. SATZ. — *Bewegt, nicht zu schnell*

第2楽章 アンダンテ 2. SATZ. ANDANTE — *Andante quasi Allegretto*

第3楽章 スケルツォ 揺れ動いて 3. SATZ. SCHERZO — *Bewegt*

終楽章 揺れ動いて、しかし速すぎないように FINALE — *Bewegt, doch nicht zu schnell*

1993年4月24日(土) 7:00p.m. 東京文化会館

主催：新交響楽団

●指揮

飯守 泰次郎

IIMORI Taijiro, conductor



1940年旧満州生まれ。62年桐朋学園短大指揮科卒業と同時に藤原歌劇団公演「修道女アンジェリカ」にてデビュー。63年に読売日本交響楽団の副指揮者に就任、70年までつとめる。66年ミトロプーロス国際指揮者コンクール（ニューヨーク）で4位に入賞。67～70年にプレーメン市立歌劇場指揮者兼コーチをつとめ、69年にはカラヤン国際指揮者コンクール（ベルリン）で4位入賞を果たした。その後72～76年に読売日本交響楽団の指揮者として活躍。

海外での活躍もめざましく、70年から現在に至るまでバイロイト音楽祭の音楽助手をつとめ、また指揮者兼コーチとしてドイツのマンハイム市立歌劇場（70～73年）、ハンブルク市立歌劇場（73～75年）、レーゲンスブルク市立歌劇場（77～78年）に籍を置く。これら内外の活躍に対して72年に芸術選奨新人賞（東京）と、シーズン最高指揮者賞（バルセロナ）を受賞している。78～83年にはオランダ・エンスヘーデ市立歌劇場の第一指揮者をつとめ、79年には同市立音楽院オーケストラの指揮者となり現在に至っている。

83年に帰国し、東京都響定期公演などに出演する他、日生劇場開場20周年記念モーツァルト・シリーズで「魔笛」「コシ・ファン・トゥッテ」を指揮した。最近では東京都響、東京フィル、新星日響、札響、読売日響、日本フィルなどと共演している。現在はオランダ・エンスヘーデ市立音楽院のオーケストラ主任教授および名古屋フィル指揮者。

ワグナー：歌劇「ローエングリン」第1幕への前奏曲

Richard WAGNER: Prelude to the 1st act of the Opera LOHENGRIN

3幕のロマン的オペラ『ローエングリン』はワグナー（1813～1883）の完成された第6番目の劇場用作品にあたり、本日序曲が演奏される前作『タンホイザー』の完成後間もない1845年の夏から台本執筆に着手、48年4月に前奏曲の作曲をもって完成した。しかしその後、1848年のパリ二月革命に端を発するドレスデンの革命的騒擾（49年5月）に、宮廷歌劇場指揮者たる身分でありながら加担したとして指名手配されたため、初演がリストの指揮のもとワイマール宮廷歌劇場で行われたのは1850年8月28日、ゲーテの誕生日のことであった。作曲者自身はもちろん立ち会えず、彼が初めて自作を聴いたのはさらに11年を経たウィーンでの上演でのことであった。

『ローエングリン』は前作に続いて中世の伝説に題材をとっており、ライン川下流域に広く分布する「白鳥の騎士」説話およびその背景となる、十字架上のキリストの血を受けた聖杯を守護する「聖杯騎士団」の存在に基いている。内容をひとことでは、伝説に基く超人間的な神格と純人間的な女性との恋愛およびそれからくる悲劇的結末を、ドイツ国王ハインリッヒ1世の治績、キリスト教の北部ヨーロッパへの普及（舞台は10世紀前半のアントワープ）といった歴史的要素を加味して描いたものと言える（ちなみに題名の『ローエングリン』とは「ロレーヌ人ガレン」の意だそうである）。前作『タンホイザー』までのいわゆる番号歌劇のスタイルを廃し、ワグナーのトレードマークともいえる示導動機の導入により全体の統一を図り、さらに序曲に代えて前奏曲を置くなど、ワグナーの個性が明確に表われた最初の作品といえることができる。

本日演奏される第1幕への前奏曲については、ワグナー自身による詳細な解説が残されている他、初演者であるリストによる熱狂的な評論をはじめ、パリ上演に先立つ演奏会でこの曲を聴いたベルリオーズ、当時モスクワの新聞で音楽批評を担当していたチャイコフスキーなど多くの作曲家がこの曲の分析を行っている。さらにフランスのいわゆるワグネリアンの源流ともいえる詩人ボードレールの文学的な賛辞も忘れることができない。以下、これら先達の優れた解説によりながら前奏曲を辿っていくことにしたい。

前奏曲は終始一貫して単一の動機（「聖杯の動機」：歌劇全体でも重要な役割を果たす）に支配されており、前

作『タンホイザー』の序曲が、歌劇全体の要約ともいえるべき堂々たる内容であるのとは対照的な構成になっている。ワグナーはこの曲で初めて「前奏曲（Vorspiel）」という名称を用いたが、以後の作品では従来のイタリア風（フランス風）の大規模な「序曲（Overture）」に代えて、より簡潔で歌劇に密着し、作品全体の詩的理念を端的に示す、「前奏曲」を採用することになる。

ワグナー自身によればこの前奏曲は「天使の群れによって運ばれてきたグラールの聖杯が地上で発揮する不思議な力を、至福を恵まれた人々へのこの聖杯の引渡し」を音で表現している。曲は8パートに分かれたヴァイオリンの最高音域に静かに「聖杯の動機」が提示されて始まる。ボードレールはこの部分を「重力の桎梏から開放されていく」のを感じると評し、リストは「虹色の雲に反射する紺碧の波の反映、霞のごとく漂う天空の靈気」と表現している。展開部は、初めに木管楽器群、次いで中低弦楽器が加わり「聖杯の動機」を奏し、音域の低下により、聖杯が地上に降下してくる様子を示しながら、次第にクレッシェンドを重ねて金管楽器の全奏によるクライマックスに至り、ワグナー自身の解説によれば「聖杯がその中味の神祕的なものから、崇高なる愛を遥か彼方へと天上の火の光のように放」つ。やがて、再びクレッシェンドにより再弱音に至り、冒頭同様ヴァイオリンの最高音部に「聖杯の動機」が現われ、天使の群れは「まばゆいばかりに光輝く青々とした天空に、以前やってきた時と同じように消えていく（ワグナー）」。

このように、この前奏曲はきわめて標題的な音楽であるとともに、わずか75小節の中に「靈的にして、かつ形而下的至福」、「目も心も恍惚として意識も失わんばかりの強烈な光」、「想像の限界にまで伸びてゆく空間体験（ボードレール）」を感じさせる、「いわば神聖化の儀式のような、われわれの世俗の生活よりも高次の意味を持つ非日常的な出来事に対して、われわれの魂に準備をさせるための呪文（リスト）」なのでもある。

前田 浩剛（チェロ）

楽器編成：フルート3、オーボエ2、コールアングレ、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、シンバル、弦5部

ワーグナー：歌劇「タンホイザー」序曲

Richard WAGNER : Overture to the Opera TANNHÄUSER

歌劇「タンホイザー」は2つの古い物語『タンホイザー伝説』と『ワルトブルク城の歌合戦伝説』をワーグナー自身が融合して台本を執筆した（ワーグナーは総合芸術作品を作り上げるために努力するのが芸術家の任務であると考えていたので、台本も作曲も自身で行っていた）。

完成は1845年4月、初演は同年の10月にドレスデン宮廷劇場でワーグナー自身の指揮で行われた。初演当時はあまり評判がよくなかったため、2年後に上演される際に改作したものを通称『ドレスデン版』という。また、1861年パリ初演の際、貴族階級の人々に受け入れられるように、バレエ部分を増強したものを『パリ版』という。ワーグナーは『パリ版』を支持していたが、様式的に統一されている『ドレスデン版』とともに現在では両版が上演されている。

物語

中世の騎士であり吟遊詩人でもあるタンホイザーはワルトブルク城の城主の姪エリーザベト姫と愛情を交わしていたが、諸国を遍歴中に禁断の地、歓楽と官能の王国ヴェーヌスベルクの女神ヴェーヌスに魅せられ、とりこになってしまう。しかし、歓楽の日々を過ごすうちに罪に気づき、再びワルトブルクへ帰ってくる。

ある日、城で騎士らによる歌合戦が催され、城主より『愛の本質』という課題が与えられる。他の騎士たちが次々と、純愛、清らかな愛を歌いあげるのをタンホイザーは嘲笑し、官能と愛欲を讃えたためヴェーヌスベルクにいたことが露見し、人々に糾弾される。エリーザベト姫がとりなしたが、城主はローマ法王のもとへ罪の許しを乞いに行くべきという。タンホイザーは巡礼の列とともにローマへ向かう。

しかし、ローマ法王は『ヴェーヌスベルクに足をとどめた者には救いはない』と宣言し、失望したタンホイザーは再び歓楽を求めてヴェーヌスへ行こうとする。すると葬列が近づく。エリーザベト姫がタンホイザーの贖罪を祈り、天に命を捧げたのであつ

た。タンホイザーは亡きエリーザベト姫の遺骸の傍らに倒れ、息絶える。すると奇跡が起こり、タンホイザーの罪は許され、人々は神を仰ぎたたえる。

序曲

序曲には物語全体が圧縮されて表現されており、秀作といわれている。大きく3つの部分から成っている。（a b a形式）

アンダンテ、マエストーソ ホ長調 4分の3拍子
でまず『巡礼の合唱』が管楽器合奏で始まり、しだいに弦楽器が加わり荘厳さを増し、何回も奏される。だんだん合唱が遠ざかっていく様子が木管群によって表現される。

アレグロ 2分の2拍子に変わりヴィオラによってヴェーヌスベルクの妖艶な世界が表わされる。弦楽器で力強く『ヴェーヌス賛歌』が奏でられ、ヴァイオリン独奏の導入によりクラリネットによる『ヴェーヌスの動機』、ヴァイオリンによる『誘惑の声』が現われ、モルト・ヴィヴァーチェで木管群と弦楽器群の『乱舞の動機』となる。夜が明けてきてヴェーヌスの世界は遠ざかり、再び巡礼の合唱が聞こえてくる。ホルンによる対位的歌声（不浄から救われたヴェーヌスベルクの喜びの声）と神の歌が合わさり、力強く荘厳に序曲は終結する。

大藪 言子（クラリネット）

楽器編成：フルート3（3番ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、シンバル、トライアングル、タンブリン、弦5部

ブルックナー：交響曲第4番 変ホ長調「ロマン的」 第2稿(1878/80)

Anton BRUCKNER: Symphony No.4 in E-flat major "Romantic" (1878/80 version)

ブルックナーは全部で11曲の交響曲を書いていますが、6作目に当たるこの第4番は、作曲者の生前から特に親しまれていた曲のひとつです。

ブルックナーはウィーン時代初期の1872年から74年にかけて、第2、第3、第4という3つの交響曲を年1作の割合で作曲しています。これほど集中的な創作活動はあとにも先にもありませんでした。しかも1作ごとに構想が巨大化してゆき、きわめて大胆で前衛的と言うべき音楽になってゆきます。こうした流れが行き着いたところが第4番の初稿(1874)でした。因みに、それまでの交響曲は短調ばかりでしたが、この作品以後しばらくの間は長調の作品が続きます。

ところが、オーケストラに対してあまりに過酷な要求を課すことになってしまったため、ブルックナーはこれらの作品の徹底的な書き直しを始めます。77年の第3の初演が惨憺たる失敗に終わったことも反省材料でした。その結果として第4番も今日一般に演奏される形となったわけです。このいわゆる第2稿は、魅力的で親しみやすく、全体の見通しもよくなっていますが、その反面、音楽的な密度を持続させながら聴かせることが難しくなっています。その原因は、ひとつには、それなりに完結していた音楽が書き直しによって換骨奪胎されてしまったからだとも言えます。そうしたある意味での弱点を補い、聴き手に常に新しい魅力を発見させることも、この曲で演奏者に課せられた役割でありましょう。

なお第4番が初めて出版されたのは89年でしたが、この出版譜は弟子のフェルディナント・レーヴェが——作曲者と作品のためによかれと思って——さらに大幅に書き直しの筆を加えたものです。本日の演奏ではごく一部でこの初版譜が採り入れられていますが、これは指揮者の方の音楽的な判断から、ヨーロッパにおける伝統的な習慣に従ったためです。

ところで第4番には「ロマン的」というタイトルが付いています。これは作曲者自身によるものです。研究者によっては、この「ロマン的」とはヴァーグナーの『ローエングリン』的なロマン性を指すのだ、

と主張する人もいます。ブルックナーは晩年にオペラ作曲の提案があったおりに、自分が作曲するとしたら「ローエングリン風の、ロマン的で、宗教的・神秘的で、特にいかなる不純とも無縁のもの」になるだろう、と答えているからです。実際、第4番については、以下のように作曲者自身の解説がいくつか伝えられています。それによると、この作品、特に第1楽章は『ローエングリン』の第3幕第3場、さらには『ジークフリート』第2幕の「森の囁き」を彷彿とさせる標題音楽の内容を持っていることとなります。

第1楽章は中世の都市。冒頭は夜明けの黎明。市庁舎の塔から朝の時を告げるラッパが聞こえる。やがて市門が開き、駿馬に跨がって騎士たちが城外へ駆け出す。自然の魅惑が彼らをつつむ。森の鳥たち（シジュウカラ）の囁りと、心地よい自然の声を聴く幸福な感情。**第2楽章アンダンテ**は歌（リート）と祈り、それにセレナード。**第3楽章スケルツォ**は狩り、**トリオ**は森で食事をとる狩人たちの舞曲。**フィナーレ**は一時「民衆の祭り」と言われていましたが、かなり書き直された第2稿には特にタイトルはありません。ただ弦のトレモロでひそやかに始まるコードは「ロマン的なものの白鳥の歌」と説明されています。

これらは作曲者自身が言い、あるいは書いたということが確認されている説明です。中には納得しがたいものもあるでしょうが、おおむね率直に受け入れられると思います。たしかに第4番はブルックナーの中でも最も映像的・聴覚的なイメージが豊かな交響曲で、それは特に森の鳥たちの声など、自然と関わりのある部分で歴然としています。

しかし、ブルックナーの音楽は本質的には標題音楽ではありません。ブルックナーの音楽はもっと根源的な何か、あらゆる感情の原型とでも言うべきものの、それに往々にして宇宙的な広がりや、聴き手に直接感じさせるのではないのでしょうか。作曲者の説明は、中には発想の段階からのものもあるでしょうが、基本的にはあくまでも人に判りやすく解説するためのものであって、創作行為の終了したあとの事

後的なものと考えられます。私たちはあまり一義的なイメージには縛られないで、もっと自由に想像力の翼をはばたかせてよいのです。ただ、いったん作曲家自身による説明を知ってしまった以上は、それを全く無視することもできません。結局、私たちの作品理解は、各人各様の直観と、そのつど獲得された知識との間で、絶え間なく対話が行われながら、幅が広げられ深められてゆくものではないでしょうか。

なお『タンホイザー』もブルックナーと縁の深いオペラです。これは交響曲の世界に足を踏み入れる直前の1863年に初めて体験したヴァーグナー音楽ですし、後の創作において有形無形の影響が窺われる作品でもあります。この第4番にも、狩りのホルン

信号や変ホ長調という調の選択（『タンホイザー』第3幕の調で、聖エリーザベトを象徴する）などにそのエコーが聴かれます。天から舞い降りる白鳥を象徴する『ローエングリン』のイ長調、『タンホイザー』におけるホ長調（イ調の属調。序曲と第1幕）から変ホ長調への転換（やはり聖なるものの勝利を象徴）、そして「ロマン的」な第4番の変ホ長調というように、いろいろな関連を読み取ることのできる本日のプログラムです。

土田英三郎（東京芸術大学音楽学部助教授）

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、弦5部（本日の演奏ではグロッケンシュビール、シンバルを追加）

ワグナー、かの経済学者の……？

ドイツの生んだ偉大な作曲家リヒャルト・ワグナーの名が日本で知られるようになったのは、わが国における西洋音楽輸入の元祖のひとつ、慶應ワグネルソサエティー創立の1901(明治34)年の頃だと思われる。当時、西洋音楽の理解者は少なく、それどころかピアノの音を聴いたことのある人さえほんの少し、という時代であった。

その頃、慶應の学生に秋葉純一郎(のち三越)という芸術サークルの草分け的存在のハイカラさんがいた。この人が奥野敏郎(三井物産)と田村真一(毎日新聞)と連れ立って上野の音楽学校のコンサートを聴きに行った。滝廉太郎のピアノ、三浦環の歌を聴いて非常に感激し、「我々も音楽会を開こう」と話し合ったのが始まり。

「19世紀における楽聖リヒャルト・ワグナーが前代未聞の楽劇なる新声を唱導し近代世界の楽壇に一大生面を切り開いた」と、その高遠雄渾なる楽風に感激し、リヒャルト・ワグナーの名にちなんで「ワグネル・ソサエティー」と命名したのである。しかし当時の大学内では「ワグネル」などとポスターを出すと、ドイツの経済学者アドルフ・H・ワグナー博士(1835～1917)の研究会かと間違える人が多かったという。

ワグナーの管弦楽曲の世界初のレコーディングは1912年、スコフスキーがフィラデルフィア管弦楽団を指揮したタンホイザー序曲やローエングリン第3幕の前奏曲である。日本でのワグナーの初演は1918(大正7)年

頃だそう。

さて、ここでワグナー家とワグネル・ソサエティーの初対面をご紹介します。バイロイト音楽祭の総監督であるヴォルフガング・ワグナー氏は大作曲家リヒャルトの曾孫であり、フランツ・リストの曾孫だが、1979年4月、東京と大阪で開催された「バイロイトのワグナー祭100年展」の折に初来日し、念願の「ワグナー家とワグネル・ソサエティーとの初対面」が実現した。ワグネルによる「タンホイザー序曲」「マイスタージンガー前奏曲」が披露された後の歓迎会席上、氏はこう述べられた。

「私の祖父の名を冠したオーケストラが遠い異国の大学で80余年も前に作られていたことに驚いた。今日ではバイロイトでも日本人の音楽家が活躍しており、優秀な日本人がいなければ良いオペラの上演は不可能です」

石川 嘉一

(新響チェロ・慶應義塾ワグネルソサエティー公式行事専任指揮者)



W.ワグナー氏と筆者。1979年、ホテルオークラにて。

ベルリン芸術週間参加のための寄付のお願い

新交響楽団は今年9月5日～10日にベルリン芸術週間に参加いたします。石井眞木の指揮のもと、同氏作曲の「浮游する風」、伊福部昭の「マリンバとオーケストラのためのラウダ・コンチェルタータ（独奏：安倍圭子）」、そして藤田正典の委嘱新作という全曲邦人プログラムを演奏します。これは今年の芸術週間のテーマ「日本」をふまえたものです。

歴史的な経緯からヨーロッパで最も“前衛的”な都市のひとつであるベルリンで日本を代表する現代音楽の一端をアマチュアオーケストラの新交響楽団が紹介することは大きな意義を持つものと自負しております。

演奏旅行の予算総額は約6,900万円（団員旅費滞在費・楽器運搬借用料・指揮者および独奏者謝礼他）で、このうち芸術週間事務局が約200万円負担、団員の個人負担を約4,000万円として、残りの約2,900万円を公的・民間の基金や助成に負う計画ですが、昨今の不況の中で経済の悪化はこの分野への支出をまず直撃しており、資金の調達は厳しい状況です。

ここで入場料をお支払いいただいた聴衆の皆様に対して誠に勝手なお願いではありますが、この厳しい状況をご賢察の上、ご寄付をいただければ幸いに存じます。なお、ご寄付をいただける場合は、ホール出口の寄付受付で承っておりますので、よろしくお願い申し上げます。また、郵便振替（新交響楽団維持会：東京3-28074、裏面通信欄には「ベルリン演奏旅行」とご記入ください）でも承っております。

なお勝手ながら金額は1口2,000円、1口以上をお願い申し上げます。また、ご寄付いただきました方のお名前は演奏会プログラムに掲載させていただきます。（文中敬称略）

1993年1月30日 新交響楽団

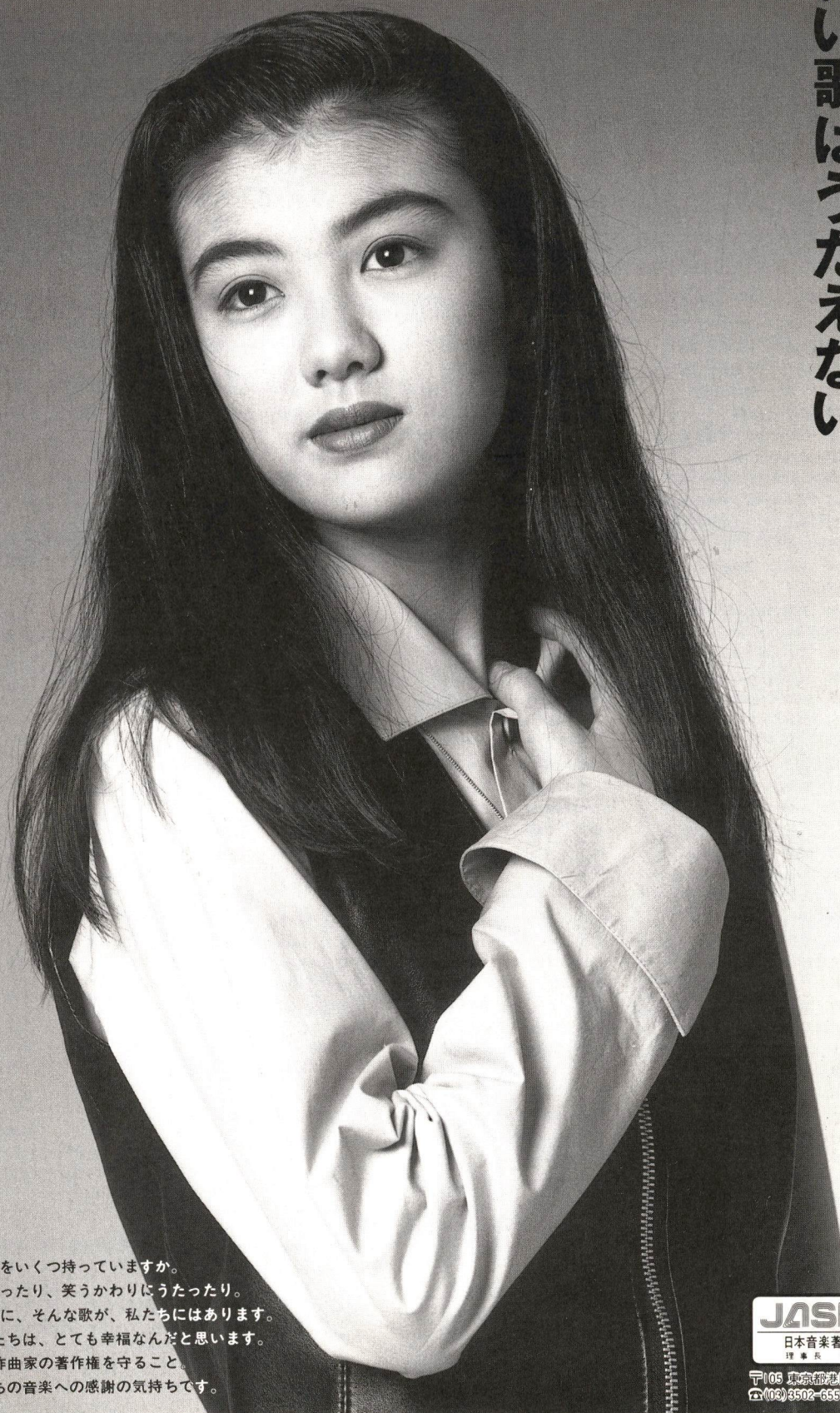
前回138回演奏会プログラム紙上でご寄付をお願いいたしましたところ、多くの方から暖かいご支援をいただきました。この紙面にて団員一同よりお礼を申し上げますとともに、以下にお名前を掲載させていただきます。なお、ご寄付の受付は旅行直前まで行っておりますので、今後とも新交響楽団に暖かいご支援、ご助言を賜りますよう、あらためてお願い申し上げます。

寄付者御芳名

（五十音順・敬称略、1993年4月12日現在。）

相原 素子	岡藤 オカベテック	佐藤 洋	中川 自通	藤井 澄子	山内 建
青木 朗	奥田 エミ	シーバート・ジョセフ	長澤 秀子	藤本潤一郎	山崎 信子
安齋 博美	落合 典子	塩田 説子	永田 雅夫	古田 慎二	吉田 清見
石田 信浩	小野 俊雄	篠崎 功子	中村 宏	堀川 博司	吉田 輝夫
井出 正威	加藤 紀久	志村 康宏	夏田 昌和	松田佐和子	吉野みづえ
伊藤 昭子	菊地 文	スタッド協会	西野喜久子	松伏町	吉村 高子
伊藤 伸行	久芳 素子	関 敏夫	西野 博子	文化振興事業団	和田 一郎
伊藤 雅一	熊井 昭彦	関田 和行	日本スタッド	松実 俊子	和田 裕
今井 誠	熊坂 公子	関戸 嘉光	ウェルディング	三浦 秀雄	匿名希望
内山 裕子	公文 寿子	ダイヘンスタッド	日本ドライブイット	三葉 洋子	匿名希望
江原 明子	倉金 忠	高橋 マリ	野瀬 隆子	村手 潤之	
江原 明子	小長谷孝江	塚田 則彦	長谷部宏行	森 しず江	
尾形あい子	駒井 明喜	堤 嘉延	林 安頼	森山 崇	
尾形 素臣		寺崎 志野	藤井いと子		

いい歌がなければ、
いい歌はうたえない。



好きな歌をいくつ持っていますか。

涙のかわりにうたったり、笑うかわりにうたったり。

選んだわけでもないのに、そんな歌が、私たちにはあります。

うたえる歌を持つ私たちは、とても幸福なんだと思います。

作詞家、作曲家の著作権を守ること

それは、私たちの音楽への感謝の気持ちです。

JASRAC

日本音楽著作権協会

理事長 石井 廣由起

〒105 東京都港区西新橋1-7-13

☎(03) 3502-6581

THANKS FOR MUSIC